

アンコール遺跡タニ窯跡群第5次調査略報（期間： 1999年8月1日~15日）

| | |
|-----|---|
| 著者 | 青柳 洋治, 佐々木 達夫 |
| 雑誌名 | カンボジアの文化復興 |
| 巻 | 16 |
| ページ | 174-175 |
| 発行年 | 1999-12-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/17387 |

8. アンコール遺跡タニ窯跡群第5次調査略報

(期間 1999年8月1日～15日)

青柳洋治／佐々木達夫

調査期間：1999.8.1～8.15

調査班構成：青柳洋治、佐々木達夫、野上建紀、田中和彦、丸井雅子、隅田登紀子、研修生5人(学生2人を含む)、作業員10人他

調査目的：

1. B1窯の燃焼室の精査、モノハラの調査
2. B4窯のトレンチ調査
3. プノン・クレン窯の踏査
4. 遺物散布地(消費地)の調査

調査成果：

1. B1窯の燃焼室の精査、モノハラの調査

B1窯燃焼室の精査の結果、B1窯は、新・旧二つの窯からなることが判明。つまり、新窯(A窯)は旧窯(B窯)の上に新たにつくられていた。共に、通風孔の両側に二つの焚き口を有する窯で、新旧の窯の構造は、基本的に同型で、サイズに違いがある。今後、焼成室の床面の広がりを確認し、平面プランの想定が新たな課題となった。

それで、B1の主軸線上に、サブトレンチを入れた結果、A窯焼成室の床面下に柱跡及びB窯の床面を確認した。次回、この床面の広がりや壁の立ちあがり部分を確定する必要がある。現状の観察では、B窯の残存、保存状況は、極めて良好。

モノハラの状況を把握するため、第3トレンチ、第4トレンチ、第5トレンチ、第6トレンチを設定した結果、大量の廃品、窯道具を収集。量的には、第4次までの発掘品、表採品の量を遥かに越え、これらの分類整理が、新たな緊急の課題となっている。このため、出土品の整理分類、選別のため、発掘調査の他に、分類・実測のための調査団の派遣が必要となっている。また、第4トレンチの砂地層(現地表下1m)で圧縮された甕が壁に接する状態で見つかった土壙状の遺構は、作業小屋ないし工房等に関係するものではないかと理解し、この確認調査も新たな課題となっている。

2. B4窯のトレンチ調査

B4窯のトレンチ調査の結果、主軸線は、B1窯と同じく南北に走り、床面の一部と壁の立ちあがりを確認して埋め戻した。

3. プノン・クレンの踏査

プノン・クレンのアンルン・トムアンルン・トムの窯業地を踏査し、資料を収集。この結果、タニ窯の製品とプノン・クレン（アンルン・トム）の製品との化学分析の比較が可能となり、アンチュリアン氏らに、一部国外持ち出しの許可を申請。また、分析用の資料として、タニ製品、アンルン・トム製品の選別を行った。なお、スミソニアン研究機構のヴァンデバー博士からすでに協力の内諾を得ている。

4. 遺物散布地（消費地）の調査

(1) スラスラーン東側の畑（コック・プリー）の踏査

中国陶器（13Cの徳化系白磁、14Cの龍泉系青磁、17、18Cの染付）とクメール陶器が大量に散布。この地区における少なくとも13、14Cから17、18Cの陶器を持つ遺跡を確認。

(2) アンコール・トム北門（別称：土の鍋門）の踏査

アレアカンポットカーという地籍名の所に中国陶磁（13、14Cの龍泉系青磁、15Cの赤絵片）が散布している。なお、丸井さんによると付近に窯跡がある由。しかし、今回は足場が悪く未確認。